

Public Interest Incorporated Foundation for Shiretoko Institute of Wildlife Management

設立財団ニュースレター

Vol. 10

2016 年 12 月 6 日発行

10/9 ～ 10/10

「知床ネイチャーキャンパス 2016」を終えて

知床自然大学院大学設立財団 業務執行理事 中川 元

今年度からの新しい取り組み「知床ネイチャーキャンパス 2016」が 10 月 9～10 日の二日間、予定通り開催されました。参加者は道内外から 22 名、道外では大阪府、東京都、茨城県からの参加がありました。講師には知床世界自然遺産地域科学委員会（注 1）の委員であり、当財団の専門委員（注 2）として計画策定に携わっていただいている 5 人の先生方をお願いし、1 日目の講義、2 日目の実習と 2 日間フルにご指導をいただきました。この事業は、知床で開設を目指す高等教育機関が行う教育プログラムを実際に試行し、計画策定に生かすことが第一の目的ですが、知床の保全管理の中心で活躍されている講師陣から、世界遺産地域の先進的な取り組みを学ぶ得難い機会になったと考えています。

実習では前日の講義で学んだ現地を訪れ、講師、そして実際に現地業務に当たっている知床財団（注 3）事務局長から管理の実際や課題について学び、「現場」でこそ可能な教育プログラムの実践になりました。参加者は大学院生・学部生のほか、環境保全や保護管理業務に当たっている現職の社会人が半数を超えていました。実習や演習を通して参加者同士で学びあう場にもなったのではないのでしょうか。

知床ネイチャーキャンパスは、今回の開催結果を基にさらに内容や方法を検討し、来年度も開催する計画です。実施に当たっては講師を始め多くの関係者・関係機関の協力をいただきました。また、これらの事業は賛助会員様を始め多くの皆様のご援助で成り立っています。今後ともご支援ご協力の程よろしく願いいたします。

（注 1）知床世界遺産地域科学委員会：世界自然遺産に登録された知床の自然環境を把握し、科学的データに基づいた管理について助言を行う学識経験者による委員会。

（注 2）知床自然大学院大学計画策定専門委員会：知床に設立を目指す高等教育機関の計画策定のために設置された 12 人の専門家による委員会。

（注 3）知床財団：知床世界自然遺産地域の管理や調査等の現地業務、斜里・羅臼両町のヒグマ管理等を担う公益財団法人。



2016 年 10 月 10 日 実習風景

知床ネイチャーキャンパス 2016 開催結果

知床自然大学院大学設立財団は、2016 年 10 月 9 日、10 日、世界自然遺産・知床を舞台とした教育プログラム「知床ネイチャーキャンパス 2016」を開催しました。野生生物保護管理の分野の第一線で活躍する先生方に講師を務めていただき、1 日目の 9 日は主に講義、2 日目の 10 日は知床のフィールドでの実習を実施しました。その内容の一部を簡潔に紹介します。

開催月日 2016 年 10 月 9 日（日）～10 日（祝・月）

開催場所 講義：知床第一ホテル会議室（北海道斜里町ウトロ香川 306）

実習：知床世界遺産地域内各所

演習：知床第一ホテル会議室

参加者 22 名（大学生・大学院生 8 名、社会人 14 名）

10/9 講義

講義 1 知床の生態系の特徴と世界遺産登録までの道のり

桜井 泰憲（北海道大学名誉教授）

桜井先生は、生態系と生物多様性という登録基準など世界自然遺産知床の特徴や価値を示し、2007 年に策定した多利用型統合的流域管理計画の目的や、漁業者の自主管理を基調とする基本方針を解説しました。また確実に減少しているオホーツク海の流水量、近年の羅臼沖の海水温、漁獲量の変動など様々なデータを紹介し、たくさん獲ることよりも、付加価値を付けて売ることなど、資源管理をベースとした今後の漁業が目指すべき道を示しました。



1950 年岐阜県高山市生まれ。北海道大学水産学部卒、同大学院終了。水産学博士。青森県浅虫水族館を経て 1987 年より北海道大学水産学部勤務。同大水産学研究院教授を経て、2015 年より函館国際水産・海洋都市推進機構・函館頭足類科学研究所所長。専門は海洋生態学、水産海洋学。知床世界自然遺産地域科学委員会委員長・海域 WG 座長。

講義 2 野生動物保護管理概論 - 我が国の現状と課題

鈴木 正嗣（岐阜大学応用生物科学部教授）

鈴木先生は、かつて里山を中心に衰退していた日本の森林が 4～50 年の間に豊かな緑を取り戻している現状を説明し、自然環境に対するイメージや法律、制度、教育と現実とのギャップを指摘。神戸市でのイノシシへの餌付けの例など、シカ、クマ、サルなど分布を拡大する野生動物と人間社会の間の様々な問題を解説しました。日本の狩猟文化や野生鳥獣利用の歴史をしっかりと認識した上で、被害を起こす個体を捕獲する（効果のない不適切な捕獲はしない）体制の重要性を論じました。



1961 年東京都生まれ。帯広畜産大学大学院修士課程修了。博士（獣医学・北海道大学）。北海道大学大学院獣医学研究科助教授を経て、2007 年より岐阜大学応用生物科学部教授。北海道在住中はエゾシカやアザラシ類、現在はツキノワグマやニホンカモシカの研究にも取り組む。知床世界自然遺産地域科学委員会エゾシカ・陸上生態系 WG 委員。

講義3 野生動物管理の実際 - 知床国立公園とイエローストーン国立公園

梶 光一（東京農工大学教授）

米国のイエローストーン国立公園のエルク管理の変遷や、2006 年制定の知床半島エゾシカ保護管理計画について解説した梶先生。知床には縄文期から先住民が居住し、エゾシカを利用してきた歴史を踏まえ、原則は自然推移に委ねるが、希少植物種などの消失のおそれがある場合は保護管理措置を講じるという計画の基本方針を紹介。エゾシカの食害が許容可能かどうかの限界点を示す明確な指標を開発すべきという、ユネスコ / IUCN の勧告を解説しました。



1953 年東京都生まれ。北海道大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。北海道環境科学研究センター主任研究員を経て、2006 年より東京農工大学農学研究院教授。30 年間にわたりエゾシカ研究に従事し、北海道全域のモニタリングシステムと管理計画を策定。知床世界自然遺産地域科学委員会委員・エゾシカ・陸上生態系 WG 座長。

講義4 森川海のつながりを再生する - 知床世界自然遺産地域における試み

中村 太士（北海道大学大学院農学研究院教授）

中村先生は、森、川、海の生態系のつながりが知床の価値とした上で、これまで世界遺産地域内で改良した治山ダムなど河川工作物を紹介。施工プロセスの他、改良後にルシャ川、サシルイ川の上流でカラフトマスの産卵が増加した結果を示しました。河口での人とヒグマの軋轢を防ぐためにもサケを上流まで遡上させることや、自然産卵の野生魚は漁獲量の安定性向上につながる可能性を漁業者と共有し、河川工作物のよりよい改良法を探る重要性を論じました。



1958 年名古屋生まれ。北海道大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。アメリカのオレゴン州立大学で生態系管理学を学び、北海道大学大学院農学研究科森林管理保全学講座助教授を経て 2000 年より北海道大学大学院農学研究院教授。森と川の間など、生態系間の相互作用を土地利用も含めて流域の視点から研究。知床世界自然遺産地域科学委員会委員・河川工作物 AP 座長。

講義5 地域資源戦略論 - エコツーリズムと自然環境学習

敷田 麻実（北陸先端科学技術大学院大学教授）

エコツーリズムとは自然環境への負荷を最小限にしながら、自然環境を体験し、地元に対して何らかの利益や貢献がある観光とした敷田先生。使った地域資源の還元や再投資が、地域のエコツーリズム最大のポイントと解説しました。また知床の観光資源について、野生動物を見る直接消費より、環境負荷が少ないイメージ消費が賢い利用につながると紹介。受講生同士で考えを話し合う時間を設けるなど、和やかな雰囲気の中で 1 日目の講義を終えることができました。



1960 年石川県加賀市生まれ。オーストラリアのジェームズクック大学大学院、金沢大学大学院社会環境科学大学院博士課程修了。博士（学術）。北海道大学観光学高等研究センター教授を経て、2016 年より北陸先端科学技術大学院大学教授。地方自治体勤務の経験があり、地域マネジメントや地域人材育成、地域資源戦略が専門。知床世界自然遺産地域科学委員会委員・適正利用・エコツーリズム WG 座長。

10/10 実習

前日にしっかり講義を受け、2日目の実習はいざ知床のフィールドへ。10月上旬にしてはとても寒く、不安定な天気でしたが、受講生は熱心にメモを取るなど、各現場でいろいろなことを学びました。なお実習は、前日講義の5人の講師のほか、知床財団の増田泰事務局長に指導いただきました。



実習1 エゾシカ対策と森林復元

100㎡運動ハウス、岩尾別・100㎡運動地

知床自然センターそばの知床100㎡運動ハウスで説明を受けた後、森づくりの現場である岩尾別・100㎡運動地を巡検。近年エゾシカの食害などに悩まされているこの地で、エゾシカの囲いワナを見学し、仕組みや設置理由を学びました。知床の森に張り巡らされているエゾシカ柵も見学し、柵の内外の植生の違いなどを観察。メンテナンスの苦労や、シカとの知恵比べが続く現状について実感することができました。



実習2 国立公園利用調整地区の管理とエコツアーリズム

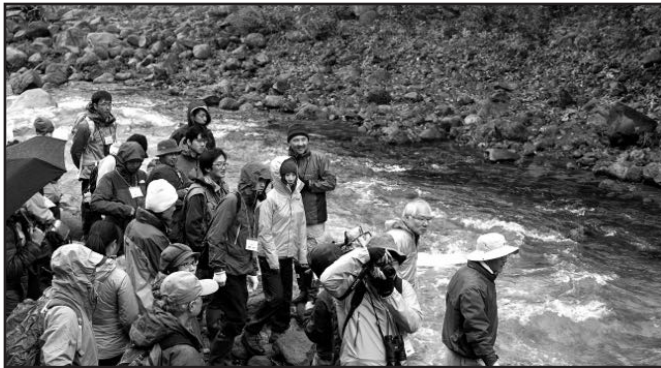
知床五湖



次に向かったのは知床五湖。ここはヒグマの生息地であり、多くの観光客が訪れるエコツアーリズムの現場です。かつてはヒグマ出没や踏み付けによる植生破壊などの課題がありましたが、これらを解決すべく、2011年度から利用調整地区制度が運用されています。今回は制度について学びながら地上遊歩道を巡り、保護と利用の實際を体験。この時間帯は晴れ間も見えてきて、とても気持ちの良い散策になりました。

実習 3 森・川・海のつながりと河川工作物改善

岩尾別川河口及び流域



昼食後の最後の実習地は、岩尾別川河口と流域でした。ヒグマの存在に気をつけながら、実際に河口を歩き、遡上中のサケを観察したほか、さけますふ化場の仕事や知床の漁業について説明を受けました。その後、川沿いを歩いて上流へ。サケ科魚類が遡上できるように改良された河川工作物（ダム）を見学し、河川生態系の回復について、前日の講義内容を思い出しながら、現場で学びました。

演習 講義・実習内容をもとにしたワークショップ

知床第一ホテル会議室

実習を終えて最後に行ったワークショップでは、世界自然遺産・知床の環境を守りながら、ヒグマとの共存のルールを、知床を訪れる人にどう伝えたら効果的なのか。2日間の講義と実習を踏まえ、受講生同士で議論し、スケッチブックを使ってそれぞれのアイデアや理由などを発表しました。正解のない難しい課題でしたが、どのグループも2日間の学びを生かした斬新なアイデアを披露。発表後には、各講師の先生方からコメントをいただきました。



◆ 実習講師紹介 ◆

増田 泰（公益財団法人知床財団事務局長・主任研究員）



1966 年大阪府生まれ。92 年北海道大学獣医学部家畜臨床繁殖学講座卒業。斜里町立知床博物館学芸員、斜里町環境保全課自然保護係長、知床財団事務局次長を経て 2014 年より現職。知床地域の生物調査や自然教育活動、世界遺産登録業務に携わり、現在は遺産地域の野生生物保護管理や調査活動に従事する。

知床ネイチャーキャンパスの講義、実習の様子は、知床自然大学院大学設立財団ホームページのブログでも詳しくお伝えしています。

こちらもぜひご覧ください ▼

<http://shiretoko-u.jp>



タイムテーブル

10/9 (日)

8:20 ~ 9:00	受講者受付
9:10 ~ 9:30	開会・主催者挨拶
9:30 ~ 10:10	アイスブレイキング・自己紹介
10:20~11:30	講義 1
11:40~12:50	講義 2
12:50~13:30	昼食休憩
13:30~14:40	講義 3
14:50~16:00	講義 4
16:10~17:20	講義 5
17:30~18:20	講義全体まとめ、質疑応答
19:00~20:30	夕食会

10/10 (月)

8:10 ~ 8:50	移動・説明
9:00 ~ 10:20	実習 1 (岩尾別知床 100 m 運動地)
10:30~12:10	実習 2 (知床五湖)
12:20~14:50	実習 3 (岩尾別川河口・流域)
14:50~15:10	移動
15:20~18:00	演習 ワークショップ
18:30~20:30	交流会

10/11 (火)

8:45 ~ 9:00	解散式
-------------	-----

参加者の声

・スケジュールが忙しいところもあったが、講義と野外活動を両方やることで知床の現状、対応の仕方、考え方が頭に入ってきてやすかった。

・知床というモデル地域を対象に、様々な視点から講義、実習があり、多方面から物事を捉える重要性を改めて感じた。

・知床ネイチャーキャンパスをやる意義は、講義で学習したことをすぐに現場の実習で体験し、肌で感じるのだと考えるので、その魅力をもっと発信してほしい。

・研究者の先生方だけでなく、次回は多くの利害関係者の方のお話も聞けると、もっと理解が深まると思う。

・参加者への課題を何パターンか用意するのはどうか？参加者が学び得たものを持ち帰るだけでは知床にメリットが少ない。

・野生生物保護管理を担う NPO で活動しているので、とても勉強になった。講義や先生方と話す中で実践したいと思うこともあり、今後の活動に活かしたい。

・様々な年齢やバックグラウンドを持つ方々が集まっていた。各分野のトップレベルの講師陣による講義、世界自然遺産地域での実習は非常に有意義な時間になった。

・受講生がネットワークとして繋がれる場を作ってほしい。

・羅臼もフィールドにしてほしい。

・知床に関わる人たちの熱い思いを感じた。

参加者アンケートより、抜粋しました

知床自然大学院大学設立財団のおすすめ本紹介



茶色のシマウマ、世界を変える

日本初の全寮制インターナショナル高校 ISAK をつくった 小林りんの物語

石川 拓治 著

ダイヤモンド社 (2016 年) 1,728 円

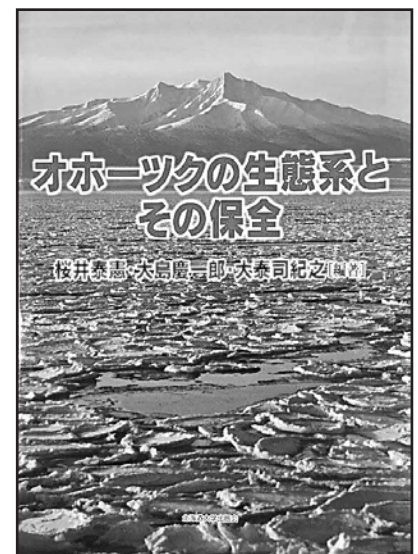
2014 年、長野県軽井沢町に開校した ISAK。全寮制のインターナショナルスクール（高等学校）で、日本国内だけでなく約 40 カ国の留学生を受け入れ、これからの時代に求められるリーダーを育成すべく、独自の教育を展開しています。本書はこの ISAK をつくった小林りんさんの半生を綴ったノンフィクションです。資金難などいくつもの困難にぶつかりながら、教育への情熱を持って学校開設へと突き進んだりんさんのエネルギーに驚くとともに、諦めない力が人を巻き込み、人を動かし、夢を叶えるのだという勇気をもらえます。教育に携わる人もそうでない人も、きつとりんさんの物語に引き込まれるのではないのでしょうか。

オホーツクの生態系とその保全

桜井 泰憲・大島 慶一郎・大森司 紀之 編著

北海道大学出版会 (2013 年) 12,960 円

地球温暖化によってオホーツク海の流氷が減少しています。海の変化は魚類や海鳥・海獣類の生態にも影響し、生態系全体の変化につながってきます。オホーツク海を取り巻く地域、ロシア極東のマガダン、サハリン、カムチャツカ半島、千島列島、そして北海道は、回遊する魚類や鯨類、トド・アザラシ類、海鳥やワシ類などの渡り鳥を通して密接なつながりを持っています。ここに生息する多様な生物について、日本とロシアの研究者は長年にわたって調査・研究を行ってきました。この本にはその研究成果が盛り込まれています。B5 版 484 ページの大作ですが、日本とロシアの 50 名以上の研究者が分担執筆し、陸域を含めた野生動物の現状と保全の課題についてまとめています。オホーツク海最南端に位置する知床の位置づけや重要性もこの本から知ることができるでしょう。



知床自然大学院大学設立財団は、 活動を支援してくださる **賛助会員、寄附金** を募集しています

■賛助会員とは

この財団の目的に賛同する個人・団体・法人が会費を通じて支援するものです。

■会員の年会費

個人会員：5,000 円

団体会員：10,000 円

法人会員：20,000 円

法人特別会員：100,000 円

※年度ごとの納入となります。

■加入申込み方法

「申込書」と「郵便振替用紙」をご使用ください。これらは当財団ホームページからプリントアウトできます（入金 は 右記口座への入金でも受付しています）



知床自然大学院大学設立財団ホームページ
賛助会員・寄附金募集ページ

■賛助会員の特典

当財団のニュースレター、講演会やネイチャーキャンパス等の案内情報を優先的にお送りします。

■寄附金について

寄附金も随時募集しています。

賛助会員加入同様にお申し込みください。

■主な入金口座について

ゆうちょ銀行	記号 19940 (普) 10138691
(※他の金融機関から 店名九九八 番号 1013869)	
北洋銀行斜里支店	店番 452 (普) 3119440
北海道銀行斜里支店	店番 904 (普) 0530326
網走信金斜里支店	店番 003 (普) 0284957
大地みらい信金羅臼支店	店番 003 (普) 1072873

オンライン寄付サイト「Give One」
ソーシャルグッドプラットフォーム「gooddo」からもご支援いただけます



設立財団ニュースレター 第 10 号

発行 公益財団法人知床自然大学院大学設立財団

〒099-4117 北海道斜里郡斜里町青葉町 28-10

TEL 0152-26-7770 FAX 0152-26-7773 E-mail sizendaigaku@wine.plala.or.jp

Web <http://www.shiretoko-u.jp>

発行日 2016 年 12 月 6 日